

柳本城西



明治から昭和

短歌雑誌『犬蓼(いぬたで)』を半世紀にわたり刊行、浜松歌壇を牽引した歌人・医師

昭和から平成

同人誌『浜松歌人』の同人、結社誌『翔(かけ)る』を創刊した歌人・司法書士



山田震太郎

万葉、古今の時代から現代まで

綿々と続く五七五七七

短歌の世界をのぞいてみませんか

浜松ゆかりの歌人たち…

特別収蔵展

賀茂真淵



江戸時代

万葉調の歌を好んだ歌人・国学者

昭和から令和

「緋の椅子」で鮮烈デビュー、口語短歌のパイオニアである歌人・高校教師



村木道彦

会期

令和7年 11月1日(土) ~ 令和8年 2月8日(日)

時間 午前9時~午後5時
会場 浜松文芸館 展示室(クリエート浜松5階)
主催 浜松市 (公財)浜松市文化振興財団

協力 賀茂真淵記念館 翔る短歌会 山田耕一郎 村木真知子

入場無料

11/17月 12/22月
12/29月~1/3土
1/19日は休館



浜松文芸館

〒430-0916 浜松市中央区早馬町2番地の1
電話・FAX 053-453-3933

公益財団法人
浜松市文化振興財団
Hamamatsu Cultural Foundation
浜松文芸館の管理・運営は浜松市文化振興財団が行っています。

●JR浜松駅より徒歩10分 遠州鉄道「遠州病院駅」東隣
遠鉄バス「県総合庁舎」、「常盤町」バス停下車
●クリエート浜松には専用駐車場がございます。
提携駐車場OGURIパーキング1・OGURIパーキング2を
ご利用の場合は、一律200円引き(40分無料)いたします。
1階事務室前の認証機に駐車券をお通しください。

江戸時代 賀茂真淵

かものまぶち

浜松城下、伊場村の賀茂神社の神官を務める岡部家に生まれた岡部三四(そうし)は、諏訪神社、五社神社の神官に学問や歌を学び、やがて伝馬町の南東の角にあった梅谷本陣に婿入りしました。その後、学問の道へ進み、京都、江戸で学び続け、賀茂真淵と号して、万葉集や古事記などから古き日本人の心を追求する新しい学問「国学」を樹立。八代將軍、徳川吉宗の次男、田安宗武に博識を認められ、和学御用学者として活躍しました。男女を問わず熱心に指導したすぐれた教育者の一面もあり、本居宣長や塙保己一などの師としても有名です。

真淵は、万葉集の研究に情熱をそそぎ、自らも多くの歌を詠んでいきます。真淵が田安家の若君に書の手本として記した古今和歌集仮名序の「なにはつ」の掛け軸や万葉集の中の遠江に関する歌を解説した著書『万葉集遠江歌考』、そして真淵の歌を弟子がまとめた『賀茂翁家集』などを展示しました。

唱歌「ふじ山」の歌詞のもとが真淵の歌であることや真淵の歌を朗誦する県居小学校の活動も紹介します。

明治から昭和 柳本城西

やなぎもとじようせい

本名は満之助、明治一二年、今の愛知県豊橋に生まれ、医師の道を深め、明治三五年には豊橋病院の医局員になります。文学にも親しんでいた城西は、翌年には、岐阜短歌会「鵜川」に作品を発表、地元で「無花果(いちじく)短歌会」を興し、中央歌壇の「馬酔木(あしび)」にも歌を送り、歌人伊藤左千夫との師弟交流が始まります。

明治三九年、浜名郡篠原村に転居し医院を開業。この年「犬蓼(いぬたで)短歌会」を創設。手作り回覧式冊子として活動を始めます。中央歌壇の「アララギ」にも作品を発表。犬蓼の選評を伊藤左千夫に依頼し指導を受け続けました。その後、斎藤茂吉や長塚節とも交流。第二次世界大戦で犬蓼の発行は三八四号で中断するも、戦後再刊。若手歌人の育成に努めました。

昭和二四年には、NHK浜松短歌講座の講師となり、昭和三〇年「浜松市民文芸」創刊とともに短歌部門の選者を務めました。昭和三九年八十六歳で永眠。犬蓼の発行は五九八号まで積み上げ、浜松の歌壇を牽引し続けました。

昭和から平成 山田震太郎

やまだしんたろう

大正一三年磐田市生まれ。震太郎の震は、前年の関東大震災の災禍を忘れぬよう命名されたとのこと。見付中学(現磐田南高)を卒業後、昭和一八年中央大学法学部に入學。三年の時、召集を受け、岐阜の部隊に入隊するも肋膜炎を患う中で終戦。大学へ復学するが結核に罹り、国立療養所天竜荘に入院し、治療のために片肺全切除という試練に遭遇します。しかしこの入院生活の中で短歌に出会いました。

昭和から令和 村木道彦

むらきみちひこ

昭和一七年東京で生まれ、鎌倉で育つ。慶応大学に入學し、在学中に雑誌「環」の同人となります。昭和四〇年に発表した口語短歌作品『緋の椅子十首』が、当時の歌壇に鮮烈な影響を与え、劇的なデビューとなりました。

「するだろう ぼくをすてたるものがたりマシユマロくちにほおばりながら」などの歌が、人々の心をとらえました。

大学卒業後、静岡県の高校教員に採用され、浜松工業高、浜松西高などに勤務、平成一五年磐田南高で退職します。その間、国語教師として熱心に指導に取り組みました。教え子たちにも大きな影響を与え、早稲田短歌会に入り作歌に励んだ歌人で、その後、作詞家として大活躍している康珍化(かんちんけい)、歌人田中槐(えんじゅ)、小池純代(すみよ)、県歌人協会副会長の清水正人など、何人もの歌の道に進んだ人材を育てています。浜松西高勤務時の昭和四九年刊行の歌集『天唇(てんしん)』、『昭和五四年の『現代歌人文庫 村木道彦歌集』などは、今でも多くのの人々に詠まれています。



いぬたで 犬蓼

浜松歌人 翔る



翔る

高校退職後も、浜松市立高の新校歌の作詞や歌の指導、浜松市民文芸の選者などを長年務め、令和六年三月、八一歳で永眠されました。